

大銀杏〈おおいちょう〉（青垣町）

佐治川の上流〈じょうりゅう〉の大名草〈おなだ〉の洗たく場から女の人たちの話声がきこえてきます。

「お梅さん、乳〈ちち〉がでんそうやなあ。」

「ちょっともでんそうや。」

「赤ちゃんが可愛〈かわい〉そうやなあ。」

「何でも、もらい乳しとるげな。」

「ほんにこまったものやなあ。」

「それで毎日〈まいにち〉、お大師〈だいし〉さんにおまいりしとるのやなあ。」

そこへまた一人やってきました。

「お梅さん、乳がでるようになったそうやで。」

「ええ、なんやて、あれほど乳のすくないお梅さんがどうしてやる。」

「さあそれや、何でも夢〈ゆめ〉のおつげとかで乳の木の皮〈かわ〉をのんだら、なんぼでもでるようになって、となりのおみよちゃんにもものましとるといまっせ。」

「そりやどうも、ありがたいこっちゃなあ。」

乳の木というのは大名草の大銀杏のことです。

大名草の大銀杏は山の高いところ（最初〈さいしょ〉に寺があったところ）にあります。

寺の石光山常滝寺はたびたびの火事にあい、現在の堂宇〈どうう〉は四度目の移転〈いてん〉だそうです。

ここにある銀杏は木のまわりは十メートル以上もあり、高さは二十数メートルにも達〈たっ〉していて、その樹枝〈じゅし〉からは一〈ひと〉かかえにあまる数枝が垂〈た〉れさがって深く地中に入って根〈ね〉となり、上方は枝葉がしげっています。

また、まわりが一メートルあまり、長さ二メートルにもあまる、いわゆる“乳”が垂〈た〉れさがっています。

土地では昔から霊〈れい〉樹として人々からあがめられ、この木を“乳の木”とよんでいます。

そして、いつのころからか、この樹皮をのむと乳の出がよくなるとうわさされるようになりました。

このことは近郷にまできこえて、多くの人があつまり、“乳の木”の樹皮はいつもけずりとられているということです。

今でも、乳の出のすくない婦人がこれをもとめるため集るそうです。

